

業務再構築を経た効率化実現と診療支援の拡充

◎齊藤 翠¹⁾藤田医科大学病院¹⁾

【はじめに】

医療機関では、これまで業務改善や働き方改革が推し進められてきたが、藤田医科大学病院においても、スマートホスピタルによる「医療サービスの質向上」「医療従事者の業務効率化」「患者の利便性向上」の実現に取り組んでいる。それに貢献するため、臨床検査部は2020年5月に検体検査を中心とした業務の再構築を行った。学校法人藤田学園は、藤田医科大学病院をはじめ4つの教育病院を有している。検査室の運営については、これまで各病院で方針を決定し、機器・試薬の選定や業務の運用について独自に取り組んできたが、これをきっかけに病院間の連携を深めるとともに、業務の効率化と診療支援の推進に取り組んでいる。一方で、大学との連携、産学連携を推し進めることによりスタッフが研究活動にも参画しやすい体制を構築した。

【取り組み】

再構築における主な取り組みとして4点があげられる。①関連病院における検査資材の統一と検査室のレイアウト変更：4病院の検査システム、検査機器・試薬の統一はスタッフの拠点間異動においても有効に作用し、人材交流の活発化が見込める。また、資材の変更に伴い第1教育病院の検査スペースを圧縮し業務の効率化を図るとともに、検査室内に共同研究スペースを設け各診療科や大学とともに共同研究が実施可能な環境を構築した。②病院間の連携強化：病院間における検体等の受け渡しと、人材流動化を活発化させた。検査項目の一部を他の教育病院にて測定を行うことにより、検体採取から結果報告までの時間短縮を図った。また、人材の流動化を活発化することにより、関連病院全体としてスタッフの知識、技術の向上を目指している。一定期間の拠点間異動や定期的な業務支援に取り組むことは意識改革にも繋がり、互いの成長に寄与するものとする。また、日常業務における問題点や精度管理状況を共有し、相互の業務効率化、検査精度の向上に努めている。③効率化に伴う検体検査の人員削減：検査室レイアウト変更および運用見直しにより日常業務に関わる人員の削減に取り組んだ。装置の設置スペースを圧縮することで動線を短縮し、これまで人の手を介して行ってきた作業は一部自動化した。また、長きに渡り引き継がれてきた内容も見直し、一部作業は実施時間帯を夜勤帯へ移行した。その効果として、診療支援の拡充や時間外業務として行うことも多かったISO15189関連業務に充てる人員が捻出可能となり、スタッフのモチベーションや品質管理の向上を目指している。④研究活動の活発化：大学との連携や産学連携を進めることで、これまで研究活動に携わる機会に恵まれなかったスタッフでも、研究活動に参画しやすい環境が構築された。また、我々だけでは困難と思われる医療現場支援ロボットの開発にも携わる機会が得られた。

【まとめ】

今回の業務再構築は、これまでとは異なる目線で運用を振り返るひとつの機会となった。業務の在り方、人員配置の見直しを行い、その効果として、検体検査は日常業務に関わる人員の削減に至った。また、病院間の連携を図ることで、関連病院全体としての品質向上を目指し、現在も活動中である。我々の目的は、患者により良い医療を提供することである。そのためには、安定した検査の精度保証、これまでも行ってきた診療支援の更なる充実、今後取り組むべきタスクシフトへの対応を実現すべきと考える。そして、これらを実現するためには人員の捻出が課題となるが、一方を充実させることで他方の管理が疎かとなってしまう。そのためには、いちど業務内容を振り返り、時代に即した取捨選択が必要ではないかと考える。手間をかけてでも我々がやらなければならないこと、システムやロボットを活用し自動化を図るべきことを見極め、業務全体の効率化を図る必要がある。我々の取り組みは未だ模索中ではあるが、今後も継続して業務改善に努め、これまで以上に診療支援や研究活動を充実させていくことが今後の課題である。

本シンポジウムでは、当院の取り組みについて紹介させていただきたい。

連絡先：0562-93-2305